

# 瀬戸内(寡雨地帯)の 野菜栽培の特長

香川県農業試験場

小 西 薫

## 気象概況

瀬戸内地域は、一般に寡雨、温暖多照で、台風などの気象災害も比較的少ない。高松市における平年の気象概況は、表1に示すように、年平均気温が、15.3℃、日照時間1,883時間、降水量1,257mm、初霜11月22日、終霜4月16日である。

表1 気象平年値 (高松市仏生山町)

月	気 温 (℃)			降 水 量 (mm)	日 照 (時間)
	最高	最低	平均		
1	8.5	0.6	4.6	46.6	122.0
2	9.2	0.6	4.9	52.0	128.0
3	12.5	2.7	7.6	80.3	158.7
4	18.5	7.5	13.1	87.7	178.4
5	22.9	12.3	17.6	110.9	173.1
6	26.5	17.7	22.1	176.1	135.2
7	30.5	23.1	26.7	157.3	187.7
8	31.5	23.3	27.4	106.4	227.8
9	27.5	19.4	23.5	203.8	152.0
10	21.7	12.5	17.2	117.7	152.3
11	16.5	7.7	12.0	74.3	142.2
12	11.4	3.2	7.3	44.0	125.5
年平均	19.8	10.9	15.3	1,257.1	1,882.9

## 立地条件と野菜生産

このような瀬戸内気象で代表される栽培作物は、タマネギおよびニンジンの採種栽培であろう。

香川県におけるこれら採種栽培は、昭和35年頃より盛んになり、43年の栽培面積はタマネギ39ha

表2 採種栽培面積の推移 (県園芸特産課)

品目	年次	昭和30年	35	40	43
タマネギ		7	17	45	39
ニンジン		—	36	40	30

で、その総生産量は54,346l、ニンジンは30haで20,600kgの生産量であった。(表2)この生産量は、全国種子生産量の60~70%を占めている。

また、香川県の耕地面積は55千haで、うち樹園地が10千haにおよぶため、水田の約40千haを差引けば畑は極めて少なく、5千ha程度あるにすぎない。

しかし、水田のほとんどは乾田で、且つ軽しよ土であるため裏作の適地が多く、したがって裏作率は抜群にたかい。

とくに香川三麦は歴史的にも有名で、昭和35年の作付面積は三麦計34,800haであった。

その後逐年減少をみせ、44年には15,050haとなり、麦の裏作率は37.6%と低下をみせたが、現在もなおかつ他県に比し麦作のウェイトは大きい。

水田は、極めてゆるやかな傾斜地にその多くが展開するため、いわゆる田畑転換が地勢的に甚だ容易であり、しかも土性が軽しよで排水がよく、耕起碎土作業が畑地同様で、麦作適地としてたかい生産性を発揮してきた。

それが裏作麦の経済性の相対的低下にともない、その代替作としてタバコがいちはやく導入され、順次野菜におよび最近急速に発展して園芸県となるに至った。

しかし、反面、気候に恵まれ、地勢、土壌的に恵まれるため、栽培される野菜の種類が多く約60種類にのぼっており、そのうち栽培面積が農林統計にあきらかにされているものだけでも、22種類の多きにおよんでいる。

これらの野菜が、県下の各地に散在して作られている。このことは、ただでさえ流通機構の不安定な野菜を更に不安定化し、生産の安定化と経営の合理化をさまたげている最大の原因となっている。

すなわち、試験研究による技術確立も遅れ、技術指導の一貫性と農家への浸透が不十分となり、また、それぞれの栽培様式における、肥培管理から収穫、包装、出荷の省力化をさまたげるのみならず、市場の信用が得られず、産地としての発展が期待できない。

このようなことから、食生活の変動にともなう消費の動向を見究め、適地に適作物を導入することを基本として、栽培品目を選択整理し、品目ごとに産地化することが先決の重要事である。

現在、本県で産地化されている野菜、または産地化が進められている野菜の種類は、表に示すと

表3 香川県の主な野菜の栽培面積 (県園芸特産課)

作物名	栽培面積	比率	作物名	栽培面積	比率
タマネギ	827.4ha	8.4%	カンラン	218.5ha	2.2%
レタス	467.4	4.7	ハクサイ	179.2	1.8
パレিশヨ	415.1	4.2	イチゴ	167.0	1.7
スイカ	324.7	3.3	ニンジン	144.0	1.5
カボチャ	321.3	3.2	露地メロン	137.1	1.4
キュウリ	301.8	3.0			

註) 1. 昭和44年秋冬作および45年春夏作の栽培面積  
 2. 比率は香川県の野菜栽培延面積 9,900haに対する割合

おりである。しかし、この表からもわかるように大産地と評価されるものはない。

タマネギは野菜の面積としては最大である。地勢、土性が淡路島や泉州のタマネギ旧産地と酷似するところから、麦の代替作物として普及拡大した。

他方、前述のとおり、開花結実期に比較的晴天が多い気象的条件から、採種の適地として旧くからタマネギの採種栽培の経験があったことも、今日のタマネギ産地を生み出した大きな理由の一つであろう。

また、表の作目をみてもわかるとおり、香川の野菜は露地ものがほとんどで、施設ものはイチゴの一部がハウス栽培されている程度で、そのウェイトは小さい。

施設野菜は、瀬戸内地域全般を通じてみるべきものが少ない。本県もその例外ではなく、県内自給の域をでていない。

なぜ、このように施設野菜が伸びないのであろうか。市場条件、土地条件、経営条件を考えて、本県はそれなりに施設ものの輸送県としての適性を備えていると考えられ、あらゆる奨励施策を講

表4 営農類型と作付体系の一例

営農類型	作付体系
米+野菜	水稲 — { <ul style="list-style-type: none"> <li>レタス</li> <li>タマネギ</li> </ul> — { <ul style="list-style-type: none"> <li>露地メロン</li> <li>スイカ</li> <li>カボチャ</li> </ul>
米+タバコ+野菜	タバコ — { <ul style="list-style-type: none"> <li>夏秋キュウリ</li> <li>水稲</li> </ul> — { <ul style="list-style-type: none"> <li>レタス</li> <li>タマネギ</li> </ul>

じているにもかかわらず普及拡大しない。その理由として考えられることは、旧くから土

地利用度が高く、水稻を中心にタバコ、野菜の作付体系がとられ、作目の編成が進んでおり(表4参照)、充分とはいえないまでも一応の所得水準に到達しているとみられる。しかもそれらは全般に資本粗放的で所得率がたかい。

ところが施設園芸は、大きな資本投下を必要とするばかりでなく、規模が小さく省力化が遅れており、加えて臨海工業の発展により、労働力の吸収が著しいので、集約度の高い施設野菜は敬遠されるためであろう。

また、香川の農業用水は、73%が大小2万有余の溜池に依存しており、冬季は用水がことのほか不自由である。とくに水利が満足されにくいという気象的条件下にあることも、施設野菜の伸びない一つの原因と考えられる。

野菜栽培の特質

上述のとおり、自然条件や社会的条件が野菜栽培に好適しているが、このことがまた、禍となっている反面もなきにしもあらずである。

すなわち、その特質を列記すれば次のとおりである。

- (1)水田中心の野菜園芸であること。
- (2)規模が零細で、多数の農家によって生産され、専業農家が極めて少ないこと。
- (3)価格により面積の増減が著しいこと。
- (4)多品目にわたり、1品目あたりの生産額が少ないこと。
- (5)産地の規模が小さく、また生産の基礎である生産組織と基盤設備が不十分であること。

**北海道のたまねぎは増収**

9月14日公表された北海道のタマネギの収穫予想高は札幌89,000トン、北見53,000トン合計143,000トンで、両産地とも大幅に増加する見込みです。

本年は播種は若干おくれたが、4月以降天候に恵まれたため初期生育は良好でした。7月下旬から8月上旬にかけて降水量が少なかったため、一部の地域では肥大が抑制されましたが、全般的には生育は順調であったため作柄は札幌が前年並みだったのに、北見は不良であった前年を大幅に上回るだろうと予想されています。